

展望

## 〈鬱悒さ〉を抱える定家

金子智佐代

明月記は藤原定家（一一六二年～一二四一年）の漢文日記（十九歳から七十四歳まで）。この日記を歌とともに読み解くという壮大な

知のたくらみは「短歌研究」平成十四年一月の連載に始まった。それから平成十八年までの五年間四十九回の成果が本書、高野公彦著『明月記を読むー定家の歌とともに』（上・下）である。原稿七百枚分というスケールに圧倒されつつ読む。

定家の歌の総計は四六〇八首。その多くが百首歌など、貴人からの命で詠進したものだという。『新古今和歌集』の撰者にして、自撰家集『拾遺愚草』をもつ大歌人定家。その日記からは、病気がちな反面、頑固でタフな定家の人間くささ、また、下級貴族の悲哀や〈歌の家〉御子左家の矜持が窺える。

二十一歳の後鳥羽院が主催した「院初度百首」では、作者に選出されない怒りと苦しみ、父俊成の「正治二年奏状」によって作者に加えられた欲び、苦吟、提出、翌日早々の昇殿許可等々、これらが日を追って明らかになる。スリリングだ。高野は定家を過去の天才とし

て崇めず遠ざけず、浮き世の憂さや切なさにまみれた隣人として息づかせる。

どうして定家は何度も百首歌や五十首歌を果たすことができたか。高野は「一種のワクがあつたから」だという。「全く自由であるよりも、ワクがある方がむしろ歌は作りやすい」という。例えば「二見浦百首」（西行の勸進）の構成は「春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋十首、その他三十首（述懐五首、無常五首、雑二十首）。「十題百首」（九条良経主催）は十の題（天・地・居処・草・木など）にそれぞれ十の小題が付く。ちなみに「天」の小題は日・月・星・闇・稲妻など。一首に一語、百の小題を読み込む形だ。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のともやの秋の夕ぐれ

ワク（秋二十首）の中から生まれた一首。

高野はこの歌の鑑賞に一頁以上を費やし、荒涼とした景に華やきを与える「無い」の表現効果、また、作者の視点を海上とする絵画的効果に言及する。塚本邦雄著『定家百首』、今川文雄著『訓読明月記』、久保田淳著『藤

原定家全歌集』等の出版に編集者として関わった高野の、言葉を惜しまぬ豊かな読解だ。定家の歌をすでに解釈済みの古典としてではなく、初めて出会った歌のように鑑賞する。その筆致は愛情深く、楽しげである。

「冬の荒涼美を開拓したのは定家である」、「歌といふものは、凝り固まつたものよりも単純なものの方がいいやうだ」、「詩歌とは所詮、雪月に浮かれることであらう」——このような文学観が本書のそこそこに見える。刺激的だ。「歌は、決して現実を映す鏡ではなく、どこか遠い非現実の世界と交信するために設置されたパラボラ・アンテナのやうなものなのかもしれない」という叙述も心に残る。どこから読んでもどこから読み直しても、本書には新鮮な驚きが詰まっている。

おそらく定家は書くことに没頭することで内なる〈鬱悒さ〉を打ち払はうとしてゐたのではないかと思はれる。この〈鬱悒さ〉から生まれた二つの作品、その一つが和歌であり、もう一つが明月記であつた、と私は思ふ。

定家という大きな宇宙の旅を終え、見事にその心の一点〈鬱悒さ〉に着地した、最終頁の一文だ。この〈鬱悒さ〉は表現者として選ばれし者の証しかもしれない。